

言霊参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より

その48 その後の世界の動き

第二から第三文明時代への転機となる事件としてどんなことがこの世界に起こることになるのでしょうか。その話に入る前に昔、第一文明時代から第二物質文明時代に転換するに当たり、どんなことが行われたか確認しておきます。

それは三つに方策に於いて実行されました。第一に三千年ほど前、その時まで長年の慣習となっていた日本の天津日嗣天皇の即位後の世界各地巡幸の制度が廃止されたことです。このことによって霊の本日本より外国への精神文明の伝播の道が閉ざされました。第二に崇神天皇による言霊布斗麻邇の原理の政治への適用が停止された事です。

これによって世界は文字通り精神文明の支柱を失い、弱肉強食の生存競争の社会が現出したのでした。

第三にこの生存競争の社会を基盤として第二の物質科学文明を創造する責任者としてユダヤ民族のモーゼとその子孫が選ばれました。このことを踏まえるなら、第二物質文明が醸成した人類生命の危機を回避して、第一の精神文明の原理布斗麻邇と、第二物質文明の科学原理とを支柱とする第三文明の時代を切拓く鍵は、第一の精神原理を如何にしてこの世の政治・経済の上に復活・活用出来るようにするか、そしてその事を第二文明の責任者であるユダヤの預言者のグループに如何にして納得させるか、にかかっているということが出来ます。その事をどう実現するか、が今後どんなことが起こるか、という話になります。

・ ・ その49へ続く

言霊参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より

その49 その後の世界の動き

三千年間のブランク後に、ユダヤが支配する精神的暗黒の世の中に、精神の原理布斗麻邇がどのようにして世界政治の場に登場してくるか、の実際の経緯をおはなしすることになります。その事をいみじくも預言した旧約聖書、ダニエル書（十一～十二章）の言葉を書き期すことにしましょう。

「彼は海の間において美しき聖山に天幕の宮殿をしつらはん。然れども彼はついに終わりにいたらん。之を助けるものなかるべし。その時汝の民の人々のために立つところの大いなる君ミカエル起き上がらん。是れ艱難の時なり。国ありてより以来その時に至るまでかかる艱難在りし事なかるべし。その時汝の民は救われん。すなわち書にしるされた者はみな救われん。」

ダニエル書には更に次のごとき預言が付加されています。「ダニエルよ終末の時まで此の言葉を秘し此の書を封じておけ。衆多（おおく）の者ゆきわたらん。而して知識増すべしと」これから起ころうとする現実の歴史の事件をお話するに当たって、昔のユダヤの預言者のダニエルの言葉を引用しますと、多くの人々は、「そのような運命論が現実適用されて良いのだろうか」と疑問を持たれることでありましょう。勿論お話ししている私とて、「ダニエルがそう言ったから歴史はこうなのだ」と主張するわけではありません。

日本の、そして世界の歴史を創造するのは、歴史創造の主体者である人間の心です。その人間の心の究極の原理であるアイウエオ言霊布斗麻邇によって日本と世界の歴史を見、その上で歴史の将来を展望するとき、人間が生きていく世界の歴史はかくなって行く、そうなるより他の道はないと見定めたとき、ダニエル書の預言がきわめて曖昧ではありますが、しかしいみじくも同じ内容であることを発見し、将来の歴史の展開の道筋を説明するに当たって適当だと思って取り上げているのであります。その点ご理解をご理解いただきたいと思います。

・ ・ その 50 に続く

言霊参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より

その 50 その後の世界の動き

モーゼとその霊統を引くユダヤの指導者（予言者）が自らの神選民族を活動の手足として、生存競争社会の中核となり、三千年余りの長い年月をかけた努力の結果、人類の第二物質文明は現在見るがごとき繁栄の時を迎えました。その時代の二つの主要な目的、物質科学原理の確立と、その成果によりもたらされる物質的な富を手段とする世界の再統一の事業は完遂間近となってきました。

その活動の三千年余り、彼ら予言者達は世の表面に立つことなく、また他よりの援助・助言を受けることなく、彼ら自身の堅持するいわゆる「カバラの原理」をよりどころとして自らの使命を遂行してきました。カバラの原理とは言霊布斗麻邇の原理の中の、言霊ウの欲望を中心に据えた天津金木音図をユダヤ民族の言語であるヘブライ語とある数理とを結合した法則に脚色したものと伝えられています。それは天津金木音図で示された精神構造から推察して、生存競争社会中において無敵である事を可能にする心構えであり、戦略であると云うことが出来ましょう。

旧約聖書のエホバの言葉「我は戦いの神、妬みの神、仇を報ずる神・・・」の宣言が良くその事を表明しています。彼らユダヤの預言者達は三千年を通じて人類歴史創造の責任を担って来た孤高の戦士であり勇者達なのです。

さて彼ら預言者の集団は、物質科学原理の解明と世界統一事業の完遂にめどがついたとき、彼らの本拠を日本に移してきます。自ら負うて来た民族の使命の成就という輝かしい成果を携えて、彼らの始祖モーゼの魂の故郷日本に舞上がって来ます。勿論彼ら民族の使命遂行のための民族の司令塔も移ってくるでしょう。

・ ・ その 51 に続く

言霊参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より

その 51 その後の世界の動き

預言者ダニエルの言葉「彼は美しき聖山に天幕の宮殿をしつらはん」とはこのことを指した預言書です。島国日本、美しき富士山の眺められるこの日本にユダヤの本拠が打ち立てられることであります。そして彼ユダヤの王の王ともくされる預言者は、三千年余前、彼らの祖モーゼが神足別豊鍬天皇に会ったと同様に、言霊布斗麻邇の原理を奉持する皇祖皇宗の経綸の自覚者と対面するこ

ととなります。預言者から三千年の苦闘を乗り越えて今たどり着いた使命完遂の成果についての勝ち誇った歓喜の言葉が口をついて語られることでしょう。ハレルヤの歌が聞こえてくるようです。それに対し布斗麻邇の自覚者から彼らユダヤ民族の長い年月の努力とその成果（第二物質科学文明の完成）

にたいする賞賛と犒いの言葉を持って迎えられる事でしょう。三千年の歳月を隔てた同じ魂と魂の再会の時です。預言者の心の昂揚は絶頂に達します。

その時、布斗麻邇の自覚者が何気ないように発せられる一言、その一言が第二物質科学文明の終わりと第三文明創造の開始を告げる決定的な宣言となって響くこととなります。大本教祖のいわゆる「九分九厘の一厘の仕組み」はその一言によって開始されます。

布斗麻邇の自覚者は一言、何気ない口調で預言者に問いかけます。「さて、貴方がたはこれからどうなさいますか・・・」

この言葉が預言者の胸に千鈞の重りとなって突き刺さります。この瞬間、人類の第二物質文明時代の終焉となります。

こんな事をお話ししますと、多くの方は世間知らずの著者が絵空事の空想小説のようなことを言うとお笑いになるかも知れません。けれど、そうならざるを得ない理由があって申し上げているのです。それを更に突っ込んで申しますと、布斗麻邇の側からのこの一言によって始まる人間の心の中の葛藤の事件を、昔から各宗教が言葉こそ違え異口同音に預言してきた「最後の審判」というものなのです。これから少々のページを割いて説明することにしましょう。

・ ・ その 52 に続く

言霊参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より

その 52 その後の世界の動き

人の欲望には種々あります。生まれたばかりの赤ちゃんがお乳を吸うことから、美しい着物が着たい、良い成績を取りたい、お金持ちになりたい、等等果てしがありません。その欲望の中で「世界を自分のものにしたい。世界を自分の思うように動かしたい」という欲望が最も大きなもの、といって良いのではないのでしょうか。

約二千二百年の昔、中国を統一して一大帝国を樹立した秦の始皇帝は、秦の王朝を一世より二世、三世と続け、果ては万世に伝えようと考え、腹心の徐福に命じて東海の君主国日本が保持していると伝えられる不老不死の妙薬を求めさせたという物語は余りにも有名です。

その事に因んだ歌が万葉集に載せられてもいます。始皇帝の望んだ不老不死の薬とは始皇帝の肉体を不老不死にする薬のことではありません。始皇帝の世が始まる数百年前まで世界の豊かな精神文明の世の中の継続を可能にした日本のスメラミコトの布斗麻邇の原理のことです。徐福がその精神原理の入手が出来ないまま秦朝は滅んでしまいました。浦島太郎のおとぎ話はそれを伝えたものであります。

中国を武力統一したのですから秦の国家は武力・金力では他国よりすぐれていたに違いありません。にもかかわらずその王朝を長く維持していく方策は他（日本）に求めねばなりません。敵を倒す術と無敵になった時を続けていくことは全く別のことなのです。

多くの国を武力によって統一し、維持できると思うことは幻想に過ぎません。秦を始めローマ、蒙古、ペルシャ・・・などなど強大を誇った国家も、その繁栄が夢のごとくに滅んでいきました。三千年余の長い歳月をかけ、生存競争の社会にその金力と武力を利用して世界統一を成就させたユダヤのキング・オブ・キングズの把持するカバラの原理も一切の生存競争場裡を勝ち抜く言霊ウとオにのみ準拠した戦いの原理でしかあり得ないのです。

人は、その人が如何に強い人間であっても、長い間念願とした目的を達成し、勝利の祝杯を挙げた瞬間に「ふっ」と感じる胸中をよぎる隙間風の経験を持たぬ物はいません。特にその人が思慮深く、おごり高ぶっていないなら尚更のことです。

敵を滅ぼし世界に覇を称える事と、その後の世界を平和に維持することとの異質感を感じない人はいません。

そのキング・オブ・キングズの胸の内の隙間風の中をつんざくように、布斗麻邇の自覚者、八千年にわたる人類歴史の経綸者の何気ない「さて今後どうなさるおつもりですか」の言葉が鳴り響く事となります。

・ ・ その 53 に続く

言霊参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より

その 53 その後の世界の動き

その何気なく、和やかに発せられる言葉は、それが如何に優しく投げかけられた言葉であっても、言霊布斗麻邇の原理の言霊イとエに則った人間の全性能を熟知した権威の言葉です。キング・オブ・キングズが決して持ち合わせていないことを承知した、強権によることなく、平和な社会をもたらす事の出来る心理の言葉です。キング・オブ・キングズの魂の真ん中が音を立て、崩壊し始めます。三千年間の信念が崩れ去っていきます。三千年の聖なる覇者の終わりの時が来たのです。次に始まらなければならない新しい人類の世紀を建設する心とその原理を彼は持っていないのですから。

旧約聖書ダニエル書の預言「彼は海の間において美しき聖山に天幕の宮殿をしつらはん。然れど彼ついに終わりに至らん」上記の事を指した言葉です。預言は更に次に続きます。「之をたすくる者なかるべし」ユダヤの預言者達は三千年間、モーゼの遺した使命とカバラの原理に則って生きてきました。使命は達成しました。同時にカバラの原理がその後には通用しないことを知らされます。使命とその生きる方策の二つを同時に失った彼はついに終わりを迎えることとなります。長い間独立強歩で生きてきた彼には、終わりの時も之を助ける者がいる筈もありません。この時布斗麻邇の自覚者から声がかかります。「貴方は今後共世界の政治に関わっていくおつもりですか。若し貴方がお望みなら、今後の

世界の恒久平和の方策をお教えしましょうか」

此の言葉が発せられる時が、過去二千年の暗黒の中から不死鳥のごとく甦った世界歴史経綸の原

理が再び世界政治の舞台に現身の姿を現わす第一歩の時であります。ダニエルの預言は「その時、汝の民の為に立つところの大いなる君ミカエル起ち上がらん」と告げています。聖書に云う大天使ミカエルとは言霊工の神、大本教のいわゆる「黒ずみ、金光先走り、終りに良（うしとら）の金神が現われて世の建替え、建て直しをするぞ」といった国常立命のことであります。世界歴史の真の経綸の御霊が世に現われたことです。ダニエルの預言は次のように続きます。「是れ艱難の時なり国ありてより以来その時に至るまで斯かる艱難ありし事なかるべし」と

・ ・ その 54 に続く

言霊参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より

その 54 その後の世界の動き

此の声を聞いたときからユダヤのキング・オブ・キングズの苦悩が始まります。ダビデ、ソロモン王の後ユダヤ国家滅亡の時にも預言者の心は彼ら民族の使命と、その方策として奉持したカバラの原理への確信によって揺らぐことはありませんでした。けれどもその確信した二つのものが薄れてしまった今、王の王と呼ばれる自分を小僧っこ扱いする言葉を聞く羽目になったのです。「国ありてより以来・・・」の艱難に、心は千々に乱れることでしょう。恥辱と憤怒に頭は割れんばかりとなりましょう。これより起こる預言者の心の中の苦悩を宗教書は「最後の審判」と呼びます。

ユダヤの預言者達の三千年間にわたる世界政策の功罪の一切が、事もあろうに、その預言者自身が自らの心の中に明らかに想起し、しかも自ら判定し、自認しなければならなくなるとは・・・。口惜しさに歯ぎしりすることでしょう。けれど、預言者の前に坐っている布斗麻邇の自覚者は如何にも平凡で、優しい態度で、預言者に悲しみの目を向けているだけなのです。どん底に落ちて悩み、憤り、嘆いている原因も結果も預言者の心だけなのです。

預言者の持つカバラの原理とは敵に打ち勝つ原理です。けれども眼前に坐る布斗麻邇の自覚者は敵ではありません。敵であるどころか、むしろ礼賛者であり、同情者であり、進んでアドバイザーたらんと言葉をかけてくれる人でさえあるのです。

昔から伝えられる宗教のいわゆる「最後の審判」とは、あるとき突然救世主が此の地上に現われ、地球上の人間一人一人の行状を神の目で審判し、魂清きものは天国に導かれ、汚れたる魂のものは地獄の火の中に投げ込められると語られてきました。けれどそれは今・此所で話しされている第二文明より第三文明への転換・移行の契機の瞬間の事件を勸善懲悪の信仰上の話しに脚色したものに他ありません。現代人の危機の責任を地球上の全部の人々の一人一人に問うのは見当違いです。責任を追求されるべきものは、此の三千年の物質科学文明の推進者、ユダヤの預言者であります。しかもそれら預言者の始祖モーゼにその使命を付与したのは布斗麻邇の自覚者であった神足別豊鋤天皇でありましたから、その天皇の霊統を引く現代の布斗麻邇の自覚者として、預言者の功罪を審判することは出来ません。自らその責任を負わねばならぬ立場にあるからです。それ故にこそ、キング・オブ・キングズは布斗麻邇の自覚者が奉持するアイウエオ五十音言霊の原理の鏡の前に立って、自らが自らの三千年にわたる使命の遂行上の功と罪の自己審判する事となるのです。これが今後起こるであろう「最後の審判」の真相であります。

・ ・ その 55 に続く

その 55

言霊参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より その後の世界

著者はモーゼの墓前で下記のように語りかけた

「皇祖皇宗の言霊布斗麻邇の原理に基づく人類文明創造の御経綸により、貴方と貴方の子孫であるユダヤ民族に人類の第二物質文明の創造と、その成果による人類の再統一の業が委託されました。そしてあなた方の世界の人々の中核となつての長い弛まぬ努力によって物質科学文明は今日見るごとく素晴らしい成果を上げることが出来ました。人類再統一の業も間近であります。

一方、貴方が物質文明創造促進のために採用したカバラの原理による弱肉強食の生存競争社会の現出は、地球環境破壊と人心荒廃という公害も生み出す結果となりました。今こそあなた方に委託された事業は完成の時であります。この時代が今後更に惰性となって続くなれば、人類滅亡の危機を招来すること必然です。あなたと貴方の子孫の業が皇祖皇宗の御経綸の中にあることを改めて自覚され、その仕事に有終の美を飾られ、その完成を速やかに皇祖皇宗に報告され、人類の新しい第三文明時代への転換に向かって協力されますよう努力なさいませ。三千余年の長い間まことにご苦労さまであります。」

宗教書には剣または杖という言葉がよく見られる。剣はものを斬るもの、杖は道を歩む助けとなるものであり、共に人が世を渡る上に心の頼りとなる人間天与の判断力を表徴してゐる。アロンの杖（旧約聖書）、「両頭を截断すれば一剣天に倚って寒し」、不動明王の智剣等々が伝えられている。「ああしょうか、こうしょうか」の小賢しい知識の迷いを振り払うと、自ずと人間が本来授かっている実践の知恵が心から湧きだし、物事を最も良い形で処理してくれる。是れが宗教で云う杖であり、剣である。これを依り代として得られる平静な心を不動心という。何事にあつても動揺せず、物事に対処できる心の事である。（合氣道が教えようとしているのは、この不動心を自分に身に付けることである 言霊エの心の使い方）

しかし宗教で云うところの不動心が人間の一切の物事に適切に対処して誤ることがないかという、必ずしもそうではない。そこに自ずと現界がある。確かに不動心は人間個人の日常の生活に関しては心の依り代でありうる。

けれど事がひとたび人類的・世界的な視野で考えねばならぬ問題、地球環境の汚染・地球の温暖化の危機、教育の頹廢等々の問題となると宗教的不動心は何も答えを出してくれない。既存の宗教がこれらの人類の危機を回避することが出来る抜本的な提案を出したことを聞いたことがない。人類が直面する地球の破局的状況に対して既存の宗教からの救済策が提案されないならば、人類は将来は絶望なのか。

否、そうではない。世界全体の未曾有の危機を回避して、人類の新しい世紀を創造するに必要なして十分な方策を提示しうる立場が世界に唯一つ存在する。私達日本人が日常使用する日本語の中に秘められたアイウエオ五十音言霊の原理、布斗麻邇である。（人間の心の使い方を進化させること

で今の危機的状況を回避できる。その事を納得した上でユダヤのキング・オブ・キングズが動き出すと世界は危機回避に動き出すと言うことである。)

しかしそれには2021年から10年更に闇が濃くなりその後2030年からの9年間耐え生き延びよ2039年から富士は晴れたり日本晴れとなるとある人「伊勢白山道 スピリチュアルブログでトップのブロガー」は預言している。そこで第三文明が開き出すと。

布斗麻邇の原理による人類歴史の新しい創造の話の前提として、この原理より見た過去の人類の歴史を見ることにしよう。

・ ・ その56に続く

言霊参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より その後の世界

その56

古事記は言霊百神の原理の神話の結論として三貴子(みはしらのうずみこ)、天照大神・月読の命・須佐男の命の誕生を述べている。そして親神である伊弉諾の大神は三貴子のそれぞれが受け持つ歴史創造上の精神領域の分担を決定し、命令した。その分担は天照大神は高天原(言霊イ・エ)、月読の命は夜の食国(おすくに)(言霊ア・オ)、

須佐男の命は海原(言霊ウ・オ)である。またそれぞれの分担する統治の社会は天照大御神が言霊原理に基づく人類歴史の創造、月読の命は宗教・哲学・芸術、須佐男の命が物質科学・産業・経済である。

人類が言霊原理による文明創造を初めてから役五千年の間、三貴子の分担・協力の統治は平和で心豊かな人類の第一精神文明時代を築いたのである。精神文明が爛熟期を迎え、日本の皇祖皇宗の世界文明創造の方針が大きく変わり、人類の第二の文明となる物質科学の振興のための方策として、第一精神文明の鏡である言霊布斗麻邇を社会の表面から隠没させる事となった。言霊原理の世界政治への適用が停止され、世は弱肉強食の生存競争時代に突入することとなった。外国に於いては約三千年、日本に於いては約二千年前の出来事である。

この時より今日までの二・三千年の間に生存競争社会を培養土として、物質科学の発展、文明の利器の発明に人々はしのぎを削った。その結果、今日地球上に見るとき物質文明社会が絢爛として建設され、この上ない便利な社会とはなった。物質科学文明の一応の完成である。と同時に科学研究のための方策として仕組まれた競争一点張りの精神傾向は世界の歴史上人類が経験したことのない生存の危機状況をこの地球上に作り出してしまった。地球を取り巻く諸種の環境の劣化をもたらしたのである。この人類が挙げて謳歌する科学の法則はこの危機回避の根本の方策を何一つ示してくれない。また須佐男の命とともにこの三千年の指導精神である月読の命の宗教・哲学・芸術もこの人類の危機には無能を露呈している。

天照大御神(高天原・ ・ ・言霊原理とその活用) 言霊イ・エ 社会の表面より隠没

月読の命(夜の食国・ ・ ・宗教・哲学・芸術) 言霊ア・オ 物質科学の完成

↓

須佐男の命（海原・・・科学・産業・経済）言霊ウ・オ 人類生命の危機

この表で見る限りキリスト世紀二千年の物質科学の興隆と生存競争の行き着く結果を総決算して、人類の新しい世紀を切り拓く手段は唯一つ二千年の間暗黒の眠りにあり、世の中の意識の奥からその経緯の推移を見守ってきた言霊原理の自覚者である天津日嗣の復活・再現より他にあり得ない事と断言できる。

・・・57に続く

その57 言霊参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より その後の世界

ではどのように世界を変えていくのか、それをすでにこの第二文明の始めの頃にすでに形の上で示されている。それが大祓祝詞です。

大祓の儀式は宮中に於いてどのように行われていたか、と申しますと、大宝元年（701年）の大宝律令の神祇会に「おおよそ六月、十二月晦日の大祓は東西（大和、河内）の文部祓刀を奉り、祓詞を読む。百官男女を祓所に聚集し、中臣祓詞を宣り、卜部解除を為す。」と記されていて、また延喜格（907）にては、この時「御麻」「荒世、和世」「壺」等の「御贖」の儀式が行われ、その時、宣陽殿の南頭において奏せられる宣命が大祓祝詞である、といわれています。

集待はれる、親王、諸王、諸臣、百官人達諸聞召せと宣る。天皇が朝廷に仕へ奉る。比礼挂くる伴男、手襖挂る伴男、靱負ふ伴男、劔佩く伴男、伴男の八十伴男を始めて、官々に仕へ奉る人達の、過ち犯しけむ雑々の罪を、今年の六月晦の大祓に、祓い給ひ清め給ふ事を、諸聞召せと宣る。

以上が大祓祝詞の序文に当たります。現在各神社で称えてらっしゃる「大祓詞」は大祓祝詞の序文が全部削除されてしまっているのです。その「大祓詞」の文章が大祓祝詞だと思われているかたには、まことに奇妙に思われるでありません。本来、大祓祝詞は先にもお話しいたしましたように、天津日嗣天皇が日本国家建設の方針、世界の将来に対する予見、並びに世界の人々の中に起こるであろう罪穢れの内容の説明とその罪穢れの修祓の方法等を国民に教示した、天皇の国民に対する宣言であります。それ故、大祓祝詞を読む大中臣（総理大臣）は天皇の前で、天皇を背にして立ち、文武百官を前にして「天皇の宣言はこの様なものですよ」というように読んだものであります。

集待はれる、親王、諸王、諸臣、百官人達諸聞召せと宣る。

集待はれる、とは「此所に参集なられた」の意。親王とは、大宝令で、天皇の兄弟・姉妹および皇子・皇女の称号。明治憲法では、皇子以下皇玄孫までの男子の称号。諸王とは親王以外の皇族の意。百官とは多勢の官職にある人の意。文全体で「此所にお集まりになった親王初め皇族方、またお役人方々、お聞き下さい」ということになる。

・・・その58に続く

その 58 言霊参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より その後の世界

天皇が朝廷に仕へ奉る。比礼挂くる伴男、手襷挂る伴男、鞆負ふ伴男、劔佩く伴男、伴男の八十伴男を始めて、官々に仕へ奉る人達の

この文章は、天皇が政治を知らしめず朝廷に、役人として務めている人々の四種類の役職について述べるところであります。その四種類とは第一に比礼挂（ひれか）くる、第二に手襷挂（たすきか）くる、第三に鞆負（ゆきお）ふ、第四に劔佩（たちは）く、のそれぞれの伴男（とものお）であります。文章を読んだだけでは、現代人には全く何の事だかお分かりにならないでしょうが、言霊学の立場で見ると明瞭に理解できます。

それぞれを次に説明していきます。今まで幾度となくお話ししてきた事ではありますが、人の心は五段階の次元の宇宙を住み家としています。五段階すなわち五重の層を住み家としますので、人間の住む所を五重（いえ）、つまり家という訳です。この世に生まれた赤ちゃんが付与されている人間性能はアオウエイの五母音の重畳で現わされます。この五母音の並びが、天皇（すめらみこと）の人類文明創造の政（まつりごと）の場合はアイエオウ（天津太祝詞音図）と表されます。天皇の知らしめず政庁の役職の仕組みも人間性能と同様五段階となっています。この五段階の役職の内容から見ますと比礼挂くる伴男以下の役職が理解されてきます。

大祓祝詞の序文には天皇の政庁の役職として比礼挂くる伴男以下四伴男が書かれています。政庁の仕組みが五段階と申しあげましたから、四伴男では一段欠けることとなります。その一段は何か、と申しますと、そこに天皇ご自身のいらっしゃる政（まつりごと）の座ということになります。政庁の役職の言霊的順序は天津太祝詞音図のアイエオウの縦の並びで表されます。この五母音の並びにしたがって天皇と四伴男との仕組みを上より並べますと、天皇（ア）、比礼挂くる伴男（イ）、手襷挂くる伴男（エ）、鞆負ふ伴男（オ）、劔佩く伴男（ウ）となります。五段階の役職の内容について次に説明します。

天皇（すめらみこと）言霊ア

大祓祝詞に示される日本朝廷の政治の実際のやり方を述べましたが、古事記神代の巻き伊耶那岐の太神の「禊祓」であります。その「禊祓」の章の冒頭の文章を引用しますと、「ここを以ちて伊耶那岐の太神の詔りたまひしく、『吾はいな醜め醜めき穢き国に到りてありけり。かれ吾は御身の祓いせむ』 とのりたまひて、筑紫の日向の橘の小門

の阿波岐原に到りまして、禊ぎ祓へたまいき」とあります。この文章の伊耶那岐の太神とは、単に生命意志の主体である伊耶那岐の神ではなく、主体である伊耶那岐の神と客体である伊耶那美の神とが一体となった宇宙身・世界身としての伊耶那岐の大神である、と申しあげました。また文章の中の御身（おほみま）とは、単に伊耶那岐の大神の精神的身体というのではなく、伊耶那美の神の領域である黄泉の国すなわち外国で生産される種々の精神的産物を見聞し、経験してしまった伊耶那岐の神の身体という意味でありました。禊とは単に伊耶那岐の大神自身の祓いというのではなく、伊耶那岐の大神の心を心とし、外国産の文化の経験をわが身体としての禊祓でありました。それは言

霊布斗麻邇の原理に則る人類文明創造の行為であります。

大祓祝詞にあります天皇の政庁に於ける地位は右の古事記の禊祓の文章によって明らかに示されます。「御身の祓へせん」とは、あたかも母親が赤ちゃんを抱き、自らの身体と同様に育むように、外国文化を摂取し、育てることです。大祓祝詞に於ける天皇は国民という子を抱く母親のごとき慈愛を以て見そなわします。これを天皇の御身心と言います。すなわち朝廷の五段階アイエオウの次元機構の中の言霊アが天皇の地位であります。言霊アの下に、イエオウの四次元の役職が置かれるのであります。

・ ・ その 59 に続く

その 59 言霊参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より その後の世界

比礼挂くる伴男 言霊イ

比礼とは霊顕（ひれ）とも書きます。霊である言霊が眼で見て顕れるようにしたもの、の意で、神代文字、麻邇名の事です。「挂く」とは掲げるの意。「比礼挂くる」とは五十音言霊図、または言霊の原理によって世間の生産物、文化を検討するの意となります。

世界文化と言いましても、ウオアエの四段階の別があります。言霊ウに属する人間性能より産出される現象の構造・時所位（次元）は天津金木音図に参照してその実相が調べられます。以下言霊オの文化には赤玉音図が、言霊アに属する文化には宝音図が、そして言霊エの文化現象には天津太祝詞音図が適用され、検討が行われます。比礼挂くる伴男とは以上のごとく、政治の鏡である五十音言霊音図を掲げ、この鏡に則り諸文化現象を検討し、その実相を見定める役職のことであります。

手襷（たすき）挂くる伴男 言霊エ

手襷（たすき）とはまた手次とも書き、古代手の指を次々に折ったり、伸ばしたりして数を数えることであります。伊勢五十鈴宮は五十音言霊をお祭りする宮であり、奈良の石上神宮は五十音の言霊を操作・活用する五十の手法を祭る宮であります。その石上神宮に昔から伝わる「一二三四五六七八九十と数えて、これに玉を結べ」という言葉があります。五十音の言霊の動きを数で示すとき、この数を数霊（かずたま）と呼びます。この数による動き方を手の指の動きで示すことを手襷（手次）と言ったのでした。でありますから、比礼挂くる伴男が、各地で生産されてくる諸文化を、五十音図に照らしその実相を明らかにしたものを、次にどのように摂取し、社会一般の福祉にどのようにしたら役立たせる事が出来るか、の言霊原理の活用によって、すなわち手の指折り伸ばしすることによって見定め、決定する役職が手襷挂くる伴男であります。すなわち言霊エの実践智の仕事です。

韌負（ゆきお）ふ伴男 言霊オ

韌（ゆき）とは矢を入れて背負う道具です。矢は人間に向かって飛んで行くもので、人の言葉の言葉、言霊に喩えられます。比礼挂くる伴男、手襷挂くる伴男、によって、言霊原理に基づいて国民に発布される命令が決定されますと、それをそのまま言霊理論としてではなく、国民に理解され易い比喩・表徴または種々の概念的な言葉による法律・法則として国民に伝える役職のことであります。これは言霊オの働きです。

劔佩く（たちは）伴男 言靈ウ

韃負ふ伴男の韃が実際の矢の容れ物ではなく言葉の表徴であったように、っこの劔（たち）も武器としての太刀ではなく、靈的判断力である靈劔または節刀の意味であります。韃負ふ伴男によって宣布された社会の法律・法則を人間社会の中で国民に接することによって現実に執行する場合、それぞれの事情が異なり、同じ状況のものなど何一つありません。それに対応する執行者のその時、その場の適切な判断力が不可欠です。劔とはその場の判断力の事を指す言葉であります。法律が一般社会に直接触れる場での仕事でありますから、言靈ウの役職と言われます。

・ ・ その 60 に続く

その 60 言靈参照島田正路著「コトタマ学会報集下」より その後の世界

この日本語を話す日本国民の中から天津日嗣の経綸者が現われる。その経綸者とユダヤのキング・オブ・キングズが日本で出会い動くことで第三の文明の創造が始まる。その政庁の構造は前に話した様に経綸者を含め五段階の構造となる。

大祓祝詞にある「高天原に千木高しりて」とは「天津太祝詞の音図に示されるごとく、父韻タカマハラナヤサ（言靈エの心の構造図のアの段の並び）と並ぶ禊祓の手法をもって人類の歴史を創造せよ」ということである。言靈エは原理に則る天津日嗣の歴史創造の経綸者のことであり、単なる観念上の神・仏のことではない。（言靈エを自由に使いこなす靈知り「聖」のこと、歴史を創造するとは言靈エの心の構造図をもつ靈知りは、他の人の心つまり言靈ウ・オ・アの構造図の人の心の動きが全て理解できそれを、矛盾なく光りに向けることの出来る人であり、これからどのように事が運ばれていくかを事前予測でき、現象として現われる問題が起ころうとした芽を察知し、手を打つことが出来る人である。だから未来の展開も見えるため経綸者となる）

大祓祝詞にある意味は天津日嗣の経綸者が人類の文明創造の歴史を推進する手法である禊祓の原理そのものであることを示している。主体である伊邪那岐の命と客体である伊邪那美の命が一つとなった伊邪那岐の大神の立場、言いかえると歴史創造の経綸者が世界人類をわが身（御身おおみ）と考える立場、「我とは人類であり、人類とは我である」との立場に立って、世界の歴史を創造する作業である。この立場煮立つ時、歴史の経綸者は「今・此所」を一步も動くことなくして自己と世界の宿業を一手に掌握し、世界の状況を熟知し、そこから言靈原理に則り、万人歓呼の中に、いとも合理的に人類歴史を転輪させる事が可能となる。この地球上の将来の創造者こそ「動かざる者」であり、真の天津日嗣の経綸者なのである。（天津日嗣の神を祀っているのが千葉県 麻賀多町 台方にある麻賀多神社である）

以上動かざる者としての真の経綸者の立場を説明した。ここでもう一つの「動かざる者」のあることに触れておこう。それは神倭朝以前、鵜草葺不合皇朝六十九代神足別豊鋤天皇の命令・委嘱に

よって、その後三千年間にわたる人類第二の物質科学文明創造の責任者となったモーゼとその後裔のユダヤ神選民族の預言者の事である。彼らは長い努力の末に、その使命である世界の財力と戦力と権力を掌握して今や世界の再統一の事業完成寸前である。

人間に授かったウオアエイ五性能の中のウとオの次元の世界を神秘のカバラの原理によって自らの葉籠中のものとして、しかも自らは世界歴史の裏に隠れて姿を現わさず、「動かざる者」として科学原理研究と世界統一を推進させてきた。一方は日本にいて言霊アオウエイ五次元全てを自覚する動かざる天津日嗣の経綸者、また一方は現在アメリカにいる言霊ウオ 二次元の世界を統轄する動かざるユダヤの預言者、両者の歴史的な出会いは極めて近い。その出来事は人類にとって画期的行事となることであろう。その両者の中で「動く」者は誰か。後者である。何故なら、後者の使命が前者の歴史創造の経綸の中に含まれたものであるかである。

「カゴメカゴメ籠の中の鳥は 　いついつでやる 　夜明けの晩に 　鶴と亀が統べった 　後ろの正面だあれ」

籠の眼はイスラエルの国旗 　ユダヤ民族とその王キング・オブ・キングズに統一されようとして
いる第二文明の今の物質科学文明の生存競争社会の世は破滅しかない道を進んでいる（闇がますます深くなっていく）夜明けの晩闇が一番深いときに 　鶴は日本の第一精神文明主宰者で亀が第二物質文明の統一者 　ユダヤ民族とその王キング・オブ・キングズが日本に出合う 　その時後ろにいるのは本来の人間文明創造の経綸者のもと（天津日嗣の経綸者）のもとで第三の文明が開化し人類に夜明けがやってきて、籠から出られるという 　童謡に秘められた預言である。

以上が今後起こるであろう世界の動きです。

・ ・ その 61 に続く